

～3.11東日本大震災の教訓から～

平成27年3月11日
秋田県立由利高等学校

1 東日本大震災 発生

2011年（平成23年）3月11日午後2時46分。本校では、前日までの定期考査が終わり、生徒はほっと一息、いつもどおり7校時の授業が始まったばかりでした。

突然、これまで経験したことがない大きな揺れが起こり、その平穏な時は壊れました。外を見ると、校旗などを掲揚する鉄のポールが、まるで竹のように大きくなり、5分以上の長い揺れのあと、校舎は停電となりました。帰るにも電車は不通、道路は信号がつかず渋滞、ようやく家族と電話連絡が取れて涙をこぼす生徒もいる、という状況でした。

三陸沖を震源とするこの地震は、マグニチュード9という観測史上最大となり、予期せぬ巨大津波などによる死者・行方不明は約19,000人、建築物の全壊・半壊約40万戸、避難者40万人以上という大惨事となったのです。これが「東日本大震災」です。

その大震災から満4年が経ちました。小学生低学年の半数以上は、この大震災の記憶がないという調査結果が出ています。今なお一層、学校や家庭において、「自分の命は自分で守る」をモットーに、私たち一人ひとりが危機管理能力の向上を意識する必要があります。

哀悼と鎮魂の意を示すとともに、この大震災から何を学ぶべきか、今一度考えてみましょう。

2 震災後の本校の取り組み

震災直後の3月末、3年生に進級する男子生徒2人が、自ら復興ボランティアに参加しました。家族とともに出来る限りの食料を車に積んで、被災した方々へ届けたそうです。

翌年、2年部では、6月、7月、10月の3回にわたり、陸前高田市での復興ボランティアを自主企画し、延べ120人以上の生徒がガレキの撤去、側溝の泥あげ、畑の掘り起こし、草取りなどを行いました。学校祭では、由利ゼミのマーケティング班が「岩手県復興応援」として岩手県物産展を開催し、その売り上げは高田高校に送られました。また、11月の国内修学旅行では、東松島市復興プログラムに参加し、津波の傷跡が今なお生々しい被災地を見学し、希望を失わず復興に励む人々の心に触れてきました。

また、PTA母親委員の方が、母親交流大会で講師として秋田に来ていた高田高校PTAの方に依頼して、岩手の友人の安否を確認してもらうことができ、後日その友人から「捜してくれてありがとう」と無事と感謝のメールが届いた、というエピソードなども聞かれました。

学校の危機管理面では、停電時には学校から生徒・保護者への連絡が困難になることが明らかになりました。そこで、平成24年度に「緊急連絡メール」を導入しました。さらに、これまでの「火災想定」に加え、「津波襲来時」の対応も視野に入れた避難ルートと避難場所の見直しを図りました。平成25年度からは避難訓練が年3回となり、3回目は、「地震発生後に津波が襲来し、本校が避難所になった」と想定し、保育園・町内会との合同避難訓練となっています。



3 防災の心構え

幸いにも、秋田県では震災の被害が殆どありませんでした。しかしながら、この日本列島は、いつでも地震や火山の噴火が起こり得る列島である、という事実を再認識してください。

例えば、1983年の日本海中部地震では、秋田県沿岸に津波が押し寄せ、当時の合川南小学校児童13人が亡くなったり道路に液状化現象が起こるなどの被害が出ました。地震や津波に対する知識の欠如や予防の甘さが原因であった、とされています。最近秋田県が策定したハザード・マップでは、東日

本大震災規模の地震が起きた場合、由利本荘市沿岸には10m以上の津波が発生することが予想されます。内陸に位置する本校は、重大な津波危険浸水地域には含まれていません。しかし、これはあくまでも予想です。安心してはいけません。

災害や防災に対しては、十分に知識を身に付け、基本的な備えをすることが必要となります。例えば、高さ50cmの波で人が運ばれたり海にのまれることは殆どあり得ないでしょう。しかし、津波は大きな水塊ですから、高さ50cmと言っても、簡単に人を運び海にのみ込むのです。みなさんは、地震が発生した時、まず自分が何をすべきかを知っているでしょうか。どこを通過して避難するのですか。どこに避難するのですか。避難してきた人がいたら、どのように対処するのですか。家族とはどこで会うことにしていますか。停電の際には電話が通じませんが、メールアドレスを変更した人は、緊急メールに再登録をしましたか。

細かいことを言えば、冬季の寒い時期にもかかわらずコートを着ないで登校する人がいますが、もし、校外に避難し、体育館や屋外で避難生活をするようになったら、寒さにどう対応するのでしょうか。災害時には断水したり、お店も閉店したりすることもあります。学校が全校生徒分の水や食料を保証出来ないことも想定し、かばんに飲料やアメなどの非常食となり得るものを普段から携帯するなど、自分でできる範囲で気を配り、万一に備えることも大切です。

4 災害時に大切なこと

物理学者であり文筆家でもある寺田寅彦は、「天災は忘れられたる頃来る」という、有名な言葉を述べたとされています。私たちは、「そんなことあり得ない」と考えるものですが、いざ起こると人はパニックとなり、おろおろすることも多いのです。地震という、いつ起こるか予測がつかない事態に対しては、「実際起こったら」という想定を常にすることです。そしてその時に、「自分が何をすればいいのか」を、様々なケースで具体的に考えておくことです。

学校で地震が起こった場合は、先生が生徒のみなさんを誘導して避難を助けてくれます。しかし、みなさんが独りで家にいる場合や、登下校の途中で誰も指示してくれる人がいない場合もあるのです。また、先生がいる場合であっても、状況によっては必ずしも避難訓練の通りに避難できるとは限りません。その場その場の状況を的確に判断して、「自分の命は自分で守る」よう行動できなければなりません。

防災では、いかに確かな情報を得るかが生死を分ける場合もあります。多くの情報の中から、何が事実で真実なのかを見極め、デマや流言などに惑わされないようにし、他方、「いつ」「どこで」「だれが」「何を」「どのように」などの情報を的確に発信することに努めなければなりません。このことは、情報の授業や様々な調べ学習の機会でも十分に訓練できることです。

そして、大事なものは、何よりも人の「心」。人身の安全や人命尊重のために助け合い、協力し合う心です。みなさんは、秋の合同避難訓練で、狭い避難場所でお互いに配慮して落ち着いて待機したり、園児を階段で優しく抱えたり、高齢者を補助して誘導したりと、実に献身的な働きを見せてくれました。さすが、校訓「真実為原」の心を持つ由利高生です。非常時にあつては、人を思いやり、助け合い、励まし合い、ややもすれば利己的になりがちな気持ちを抑え、ルールを遵守する姿勢こそ、災害時には最も必要なのです。



5 備えよ常に

- ①津波襲来時と火災発生時の避難経路と避難場所を確認しておきましょう。
- ②地震がおこったら、机の下に隠れたり頭をカバンで覆ったりしましょう。
- ③物の落下や倒壊の恐れがある場合は、その場から離れましょう。
- ④避難しやすいように、戸や窓を開けましょう。
- ⑤もし、実験や実習で火気を使用している場合は、すぐに使用をやめましょう。
- ⑥大きな地震の30分後に大きな余震が起こることがありますので、避難後も警戒しましょう。
- ⑦メールアドレスを変更した場合は、速やかに緊急連絡メールに再登録しましょう。